

な篤学者で、既往生涯を通じての無倦の研鑽が今日の大をなしたといつてよく、自他共に認める愛知学院大学、否、宗門の至宝的存在である。単独の著述と違い、叢書ものとしては期間その他の制約があることとて、少壮学者群の補佐を必要としたことは当然のことと

いわねばならない。兎に角、大学その他の要職繁忙裡、この種の内容豊かにして平易な叙述のうちにも学的香りも高い好著を公けにされた努力は、高く評価されてよいであろう。(講談社、昭和五十三年四月、A5版、一、八〇〇円、図版二頁、本文、三七四頁)

鏡島元隆著

## 『出山面山』(日本の禅語録十八)

小坂 機 融

を本気で意図せしめ、人生の根源に関わる宗教の問題をも科学の名の下に一掃してしまふかの如き一般的風潮を醸成していったのである。

科学にせよ宗教にせよイデオロギーにせよ、すべて人間の関わる事柄においては、本意なくも本来性を逸脱して疑似化に向う傾きをもっており、自らの現実的限界を超え、独

善に対する自戒を忘却する時、真実なものへ無情な圧力を加えてしまう恐れを常に内包している。曾って宗教の名において科学の進歩にブレーキをかけたように。しかし、本来的

にはいずれも真実への還帰であり真実の探求である以上、そのいずれの名においても他を圧殺するもので有ってはならないであろう。従つて現代の状況は、本質を逸脱して皮相に流れて抜き難い泥沼に踏み込んでいと言わざるを得ない。

現在、我々が抱えている困難な病弊は、科学技術・政治・経済の問題として表面化しているが、しかし、これらはこの問題のみに限られたものではない。このことへの対応のみで本当の治癒を期待することはできないであろう。これは人間の根源に関わる人間の文化全体の問題であつて、部分的処置に終始したのでは、それは単に臭いものに蓋をしたにすぎない。現在の本質への掘り下げを無視する状況には、従来の迷信や魔術や偏執にもまさるとも劣らぬ奇怪なものを巣くわせる絶好の温床が造り上げられていて、現実社会の歪みに応じて病的症状を顕にしてくることにならざるを得ない。

現在、この科学技術の飽くなき進歩にも拘らず、人生の根本問題(宗教)が新しく問われなければならぬのも、ここにある筈である。今日「西洋の没落」が言われ、東洋への志向、就中禅に世界的関心が寄せられている

現代の科学文明の急速な進歩は、我々に豊富な物質や情報を、また簡便極まる使い捨ての生活を与えてくれることになったが、それにも増して我々を拘束してきた迷信を白日の下に晒し、客観的実証的究理によつて疑似のものをつつと剥き取り、我々の心奥から暗く忌まわしかった不合理な苦悩を拭い去つて行つた。而してそれは、恰も我々に科学万能を真剣に思わしめるほど急速に生長したのであつた。やがて現代社会に自然の征服(破壊)

という。このことも本来科学的進歩に調和する真の安らぎを摸索する人間の真実への応答の姿なのであるか。疑似化された枝末の問題を取り上げ、各自の立場に固執して相互に攻撃し合うのではなく、真実のものを明らかにする働きとして互に追求して行くべきものであろう。

しかし、現今の禅への関心には、動もすれば皮相な禅的ムードに上すべりする嫌いのあることを見逃すことはできない。それは非本質的ムードに酔い、これを観賞する立場に止まるものであり、また極めて人間的功利的欲求を容易に実現しうる手段として各方面で利用されているにすぎない。これらは共に真実に我々の本来への立ち帰り、真の安らぎの恢復ではなく、疑似の禅に一時的逃避を求めたまでのことである。真に求めらるべきは、表面的なムードではなく、禅の核心である徹しい修証にこそなければならぬであろう。この点において現状は、必ずしも充分な在り方とは云えないように思う。

仏教は、インドに発して東漸する過程で禅という中国人に消化された仏教を形成し、日本に伝承咀嚼されて、鎌倉以後の日本文化に深く根をおろしてきた。東洋の歴史的社会的

状況から現在の所、禅に関する資料文献は、日本が最も豊富であり、禅の実際的思想実践についても我が国に世界的期待が寄せられているのである。

しかし、我が国の現状は、隠々裏には真摯な応答が確かに続けられているに違いないが、顕在するものには、前述と同様であって、馳緩した風潮の中で、問う側も答える側も共に単なるムードに終始して事足れりとしている傾向を多く見るように思う。この事は、今日のあり余る禅に関する出版物に限ってみても、多くの鼻薬的なもの、疑似のものの横行に深い反省を余儀なくされる。このような中であって、真偽を識別し真を問うことは、我々にとって悩に困難なことであると言わなければならぬ。我が国は世界からこの問題について多くの期待がかけられているにかかわらず、真の応答を得るためには難しい世界でもある。従って、ここで真に本質に触れ得るためには、直接的には身心を投ずることであり、間接的には日本の祖師方が心血を注いできた行履を日本の精神文化の中に継承してきた伝統を原典（語録）について虚心に参ずることが必要不可欠なのである。しかし、従来これに応じ一般にも向く体系的な語録への導

きを我々は持たなかったのである。このようになわが国の事態が、集中されている多くの要求にもかかわらず、真実に直結しえないもどかしさを禁じえない大きな要因ではなかったであろうか。

今回、講談社より古田紹欽・入矢義高両先生監修による『日本の禅語録』全二十巻が刊行されつつあることは、前述の意味からも、真に待望されたものであり、時宜を得た真当な試みであると思う。

## 二

『日本の禅語録』全二十巻の編成の特性は、日本禅の歴史的体系化にある。入矢義高博士の「監修のことば」はこの消息を端的に述べている。

東西が大陸から禅をもたらして以来、禅は日本の文化に深く浸透したといわれる。確かに中世以降の文学や芸能に、さらには民衆の生活感情に、それは濃淡さまざまの陰影を投げ、またいわゆる禅芸術なるものをも生み出すに至った。しかし、そもそも日本の禅僧は先ず中国禅をどう受容し、そして、どう主体的に日本化したのか。その日本禅の形成は、日本固有の生活・思想と、

どのような緊張関係を孕みつつ進行したのか。いったい禅は、当時の人びとの魂の救済に、あるいは新たな魂の開発に、どのような独自の役割を果たしたのであるか。そしてまた、例へば道元・一休・正三・盤

珪・良寛といった人たちは、まぎれもなく特殊日本の禅者のタイプを呈示しているが、それらは中国禅との対比において、どのような精神史的意味をもつのであろうか。

われわれは日本禅の長い伝統を、所与の遺産としてもっている。それはかつて多くの人びとの心を吸引し培ってきた。この伝統は、また将来の日本文化に対しても、新たな生面を開くべき可能性をもってはいないであろうか。しかし今そのことへの期待を言うより前に、先ずその伝統そのものを洗い直すことから始めるのが先決であろう。未知のままに隠されたものが余りにも多いからである。

と。禅は、中世以来日本の固有の社会・生活・思想・信仰の中で独自の伝統を形成して来た。その内実は極めて龐大であり、複雑である。従って、その全容を探索し理解し体系化することは、なかなか至難な仕事であると言わなければならない。「未知のままに隠され

たものが余りにも多いから」という監修のこぼは内容の問題を超えてこのことをも含んでいると思われる。本叢書の編集においてこの点に多くの苦心が払われたことも十分に推察される。

本書の内容と分担執筆者は次の如くに予告されている。

第一卷 榮西(興禅護国論・喫茶養生記) || 古田紹欽、第二卷 道元(永平広録) || 寺田透、第三卷 大応(大応語録) || 荒木見悟、第四卷 義雲(義雲語録) || 篠原寿雄、第五卷 瑩山(伝光録) || 田島柏堂、第六卷 大燈(大燈語録) || 平野宗浄、第七卷 夢窓(夢窓語録) || 柳田聖山、第八卷 五山詩僧(虎関師鍊・雪村友梅・中巖円月・義堂周信・絶海中津) || 玉村竹二、第九卷 大智(大智偈頌) || 水野弥穂子、第十卷 寂室(寂室語録) || 入矢義高、第十一卷 抜隊(塩山和泥合集・塩山仮名法語) || 古田紹欽、第十二卷 一休(狂雲集) || 加藤周一・柳田聖山、第十三卷 沢庵(安心法門・不動智神妙録・太阿記・東海夜話抄) || 市川白弦、第十四卷 正三(盲安杖・驢鞍橋・反故集) || 藤吉慈海、第十五卷 無難(即心記・自性記等) || 市原豊太、第十六卷 盤珪(盤珪和尚御示聞書・盤珪禅師語録) || 玉城康四郎、第十七卷

鉄眼(仮字法語) || 源了円、第十八卷 卍山・面山(卍山語録・面山語録) || 鏡島元隆、第十九卷 白隠(夜船閑話・遠羅天釜・藪柑子・荊叢毒藥抄) || 鎌田茂雄、第二十卷 良寛(詩集) || 入矢義高。

この構成は、鎌倉時代の榮西・道元等に始まり、室町時代の諸禅者を経過して江戸時代の白隠・良寛に至る「日本の禅語録」を体系的に紹介することに留意したものであることが判る。

ここに輯録された三十数余の語録は、日本の禅を知る上に欠くことの出来ないものであり、この刊行によって我われは、日本の禅を歴史と思想の両面から捉らえる新しい手懸りを得たことになる。その上に、斯界の識者によって解説され、現代語訳されて、従来の漢文読み下しでは、拭いきれなかつた禅録の難解さ、親しみ難くさが一掃されたことは、特に新しく禅を志向する人達にとって、この上ない叢書と云わなければならない。

このように、本書の刊行には多くの意義が上げられるが、一面、幾つか留意して置かなければならないことがないとは云えない。

禅録の体系的集大成と言うことは、先にも言う如く、複雑な歴史状況の中に成立した個

々の禅録を、どのような基準の上を選択し、組織統一するかという困難を抱えざるを得ない。まして、編者の意図するような、来るべき日本文化への影響を考え、各時代の人々の魂の救済、或は開発を正確に見究めて行くためには、表層に鏤められているもののみでなく、基層に埋もれている多くのものが洗い出されなければならないであろう。曹洞禅系に限って見ても、農耕に徹した者、開発事業に献身した者、庶民の中に洒脱な芸術を残した者等々、民衆の生活に関わった多くの禅者の系譜を忘れることはできない。これは末孫が真に顕彰すべきを怠たれる現状が叱せられなければならないが、とまれこの地道な世界があつてこそ表層の事も在り得るのである。従つて、当然のことながらこの限定された叢書の体系も、種々の思想・実践の系譜の上に成立し、また、その捨象の上に形成されていることを再確認して置かなければならない。

この様な現代語訳の試みは、近年頗に盛んになつてゐるが、抑々それは、従来の拈提的注釈の煩瑣で迂遠な点を解消し、原文に沿つた簡明直截な語訳を示す所に大きな特徴を有している。即ち主観的に拈弄するのではなく、語学的に正確を期した訳文を冷静に施すことである。従来は、この面における客観性に不十分な所が多く見られ、近來の語録研究においては屢々この点が指摘されている。日本の語録には、それ自体にすでに問題がなくはないが、ともあれ、撰述者の原意を尊重し正確に捉らえることをすべての起点とする立場に帰着するのである。この在りようは、無論、究理の基本であり、饒舌によつて理を晦ますことを許さない厳密な態度は、古典を読むものの先ず最初に確保しなければならない事柄なのである。かくなれば、宗教書に対する現代語訳は、我々に先ず肝心な基礎を与えてくれるものとして尊重されなければならないのである。しかし、これとてもまた原意の一つの立場における限定である事を忘れてはならないであろう。

された言葉との間には、当事者においては全く直接的で親密なものであり、トータルな生命的働きを有しながら、第三者に在っては、間接的ではばらばらな部分的なものとしてしか響いて来ないと言う傾向を一般のもの以上に顕著に有つてゐるよう思う。そこで我々は、古人の拈提の世界を無下に拒絶するのではなく、語学的に厳正な語訳の基礎の上に何故かく拈弄しなければならなかつたかを考え直す必要があり、畢竟、原文に帰つて真意を味読するのだからならぬであろう。

また、禅の語録には同一の語句が、多用な意味に使われる。角度が替われば別の深意が表出される事は珍らしいことではない。従つて、その語が此所で用いられる背景を把握する配慮を失つてはならず、真意を確かめる努力を欠いてはならない。例えば「不仮修証」の語は、直接的には否定的意味であるに拘らず、一方で自然外道に墮せず、且つ造作に涉らざる無作の修証の問題を語つてゐることも事実であるからである。有名な「磨磚作鏡」の公案に対する道元禅師の受用（『正法眼蔵』坐禅箴）の如きも理なき牽強附会ではなく、莫囀作仏としての坐禅を自己の身心にあのよう読み取ることによつて彼の公案の真意を

伝えたものに外ならないからである。

新機軸による本叢書の現代語訳は、客観的に厳密さを追究した成果であるに違いないが、個々濃淡はあるにしても、等しく当該の語録と訳者自身の思索体験、或は思想信仰との飽くなき葛藤を経ない筈はない。従って、實際上、「解説」は勿論であるが、語訳にもその消息が少なからずあらわれざるをえないと思う。従来の主観的な語録の注釈と異なる新しいものではあるが、同時にその人の立場における一種の限定された解釈に他ならないのである。しかし、それは真摯になされているほどに多くの示唆を含んでいる。それ故に読む者において、親切に付けられた解説・脚註・参考資料等と併せて深く考究することのできる余地が残されていることを知って置かねばならない。

以上述べて来たことに関連して、各巻の配本に合せて出される「月報」が示唆に豊かな内容を提供していると思う。

特に本叢書の分担者が登場する座談会は、この事業のむずかしさについて根源的な所を語ってくれる。例へば「白隠と盤珪」などは、各人の性格や好み、乃至思想や信仰の在り方がにじみ出ていて面白く、個々の方々の白隠、

盤珪等および各々の語要への接し方、領得の相違などが窺われ、そこに評価の違いも微妙に現われて来ていることを知らしめられる。従って、この点から、かかる語録の理解や、そこから浮き出してくる人間像の把握が如何にむずかしいかを思い知らされ、力乏しき者には一抹の絶望を感じなくもないが、とも角も、自己の身心を抜きにして御座なりに対することは許されないことを肝に銘じさせられるのである。

### 三

前置きが長くなり肝心な所が疎かになりそうであるが、ここで本叢書第十八巻「卍山・面山」(鏡島元隆)についての紹介に入りたいと思う。

本書の構成は、この叢書の規定に随ったものであると思うが、先ず「曹洞禅復興の祖師」という副題の下に卍山・面山それぞれの人と思想について解説がつけられ、続いて「鷹峰卍山和尚法語」および「建康面山和尚普説」に対する現代語訳(上に読み下し文、下に現代語訳)、脚注が掲げられ、次いで両語録の原文が載せられ、終りに両師の略年譜、著作、関係研究論文が付けられると言うものである。

る。

近世における曹洞宗を代表する人として卍山と面山が上げられることに異論はないと思う。しかし先にも言う如く、日本における禅の精神的意義を問い、人々の魂の救済を跡づける時には、体制的な両師のほかに、また体制超越的な良寛のほかに更に別に採り上げられなければならない人々が、ここでは触れないが、あることは当然である。ともあれ、ここでは本書が、この代表的人物がどのような捉えられられているかが、我々の当面する関心事となるであろう。

本書担当の鏡島先生は、早くから江戸宗学を開かれた立場から説明することに腐心され、『正法眼蔵研究序説』および『道元禅師とその門流』等として既に成果を問われていることから、新機軸による本書を担当するに最も適任であったと思われる。

本書の一つの線は、両師に曹洞禅復興の祖師といふ重要な宗史上の位置づけをなし、その内容を吟味する形において両者の意義と限界とを問うたものであると思う。

先ず、「卍山道白 その人と思想」は、「一伝記」として時代と背景、誕生と出家、修学、宗統復古、晩年、師友・門下等の項目におい

て、時流が待望した卍山の優れた資質・豊富な参学、高い徳望、宗統復古の道念と實際行動、幅広い道交と教化等の各方面を適確に記している。この伝記は、卍山の宗統復古者と言う特殊面と、多彩な教化を及ぼした普遍的な面とを特に浮き掘りにする点に力が注がれて、従来の認識が宗統復古者として圧倒的地位を占め尽されているのに対し、卍山を新しい面から照らし出すことを強調した所に特色を示している。

次の「二思想」は、卍山 of 思想を表わす、嗣法・禅戒・清規の三部らから特に嗣法観について述べたものである。即ちその立場は、法の相続は一師印証、面授嗣法を大原則とし、特に嗣法の儀軌を重視するもので、これによれば当時の院に依って嗣を易える弊風が改まり、道元の古風に復するという独自の復古思想であったことを述べ、この考え方が、当時の宗内で大きな論争を生じ、その意味内容が問われた次第を追って、その主張の意義と限界を見極めようとしている。つまり、嗣法には形式と内容の両面が存し、そのいずれに重点を置くかによって立場が分れて来る。卍山はその二つの条件の具備を正統としつつも、現実には不可能であるという時機観に立って

面授の規則の具現による嗣法を主張したので、時代的制約下においてとらえた道元の立場であることを自覚していたであろうことを指摘し、そこに卍山の思想的限界があると言い、また同時に観念を弄ぶことに終らない現実思想家としての卍山の宗学の特徴があるとしている。

「三卍山の思想的地位」では、卍山は近世思想の特色を受けて人間復興を嗣法上に実現しようとした人であるが、真人への対面まで至らず、不徹底な面を抱えながら曹洞宗学において卍山系の宗学は、正統の地位を占めて絶対権与とされ、それを批判した天桂系の宗学が全く非義邪説として排されたが、卍山の宗義も時代的制約下の形式の復古であるとすれば、今日的にはそのような判断の形式をそのまま継承することは許されないことであるとして述べ、真に道元の古に復帰するには、両者を超えてこれを統合する広く深い立場に還るべきで、これこそが、卍山の志して成し得なかつた所であると指摘している。これは現代における我々に宗学上の新しい課題が呈示されたものであって、我々はここに江戸宗学に対して単に盲従的であったことを反省し、現代的立場から洗い直しを始めなければ

ならないことを痛感させられるものである。

#### 四

「面山瑞方 その人と思想」では、「一伝記」を卍山より四十七歳年少の面山を取り巻く学芸復興の時代背景および宗統復興進展期に入る宗門の動静の特色から説き起して、発心修行の様子を述べ、特に正師を訪ねる面山の求道と慈悲懇切に指導する損翁との親密真摯な師資の問い、老梅庵一千日閉関における眼蔵拝覧と打坐の専修、卍山との相見等が印象的に述べられている。次いで面山の宗学者としての大活躍が述べられる。この時期から八十を過ぎる晩年まで面山の講筵と著述活動は衰えず続けられた次第が語られている。この伝は、求道者、すぐれた宗学者としての面山像を追ったものと云えると思う。

「二思想」は、面山の著述が広汎なものであると同様、思想も多岐にわたる所を巧みに整理したものである。面山の特色は、歴史的な研究、書誌的研究の実証の上に立った思想であり、思想研究であったことを見定め、卍山の立場を継承した、嗣法観、禅戒思想については天桂との論争の次序を追って三者の同異を明かし、清規思想については、容槩的卍山

の立場を批判し、師損翁の説を受け継いで永平・瑩山の古規に還ることを主張して、卍山に訣別する醇乎たる面山宗学が形成されたことを明瞭にしている。

「三 面山の思想的地位」では、面山宗学の書誌的研究、歴史的研究、思想的研究が、近代の学問研究の先駆的位置を占めるものであるとして評価し、今日の宗学研究は、この一部門の継承にすぎなく、個々において面山を超えてはいても総合的には未だこれを凌駕しえない状態であり、まして面山の行学一如せる宗学の確立実践は、今後真剣に考えなければならぬとして我々に猛省を喚起している。

## 五

ここに取り上げられた両者の語録について見ることにしたい。

本書では、『卍山広録』四十九巻中より第十・第十一巻の法語が選ばれているが、それは卍山の復古道人としての一面に優るとも劣らぬ教化者として衆生縁に恵まれた一面を強く浮き掘りにする点にあるようである。出家者は勿論、大名・藩士・儒者・医師・商人・農夫等あらゆる階層に及ぶこの法語は多彩で

あり、それぞれ適切なものであって、卍山の学殖の深さに驚かされるものである。従って我々は、これを読むことによって他の追隨を許さない卍山の他の面を明確に見ることになるのである。また面山には『面山広録』二十六巻、『逸録』十二巻が存するが、本書はそれぞれにも含まれない『建康面山和尚普説』が選ばれている。この両書の選定に著者の宗学における深い見識が窺われると思う。

『建康普説』には、過去に交々の感慨がある。十数年前、酒井得元先生から故人の本当の力量を知るには「普説」を読まなければならぬことを指摘されて河村先生とこの『建康普説』を輪読した事を思ひ出す。本書の如く明快に読み切った手引きもなしに、たどたどしいものであったが、宗義の方向をまざまざと見せつけられたことを記憶している。

もう一つは、昭和四十三年面山和尚二百回遠偉に際し、永福会(芝青松寺)を中心とする面山門下の集り)で『面山選集』の刊行が永久岳水先生の監修で企てられた。その折河村孝道先生と共にお手伝いしたのであったが、やはり酒井先生より折角の選集にこの肝心な『建康普説』を加えなかった事についてお叱りを頂戴し、大変恐縮した苦い思い出が

ある。その後、貝葉書院に保存されている『建康普説』の版木の欠損二葉を補刻する為の材料を斡旋することでその責の一端を埋めさせて頂いたような次第であった。

本書では全十三章の中、前五章を掲げるのみである。紙幅の都合で致し方ないが、少くとも宗門の参学者の為には全章にわたる訳注の示されることが望ましかったのである。

## 六

以上本書の次第に随って紹介をして来たのであるが、与えられた紙数も尽きているので、思い着くことを一つだけ記すことにしたい。

卍山の時代の嗣法は、依院易師が一般には当り前であったのであるから、幾つかの寺に招聘された人達は、当然易師の問題が起った筈である。面山には已にこの事は関係ないようであるが、少くとも卍山以前の宗匠には関わりざるをえない事柄であったと思う。例へば天桂伝尊の年譜を見ると一師印証の裁下以前に幾つかの寺に請せられ、これに応じている。しかし年譜作者(直指玄端)は、これを注意深く打ち消すように仮住であったとして易師の事実はなかったとしているのである。このような情勢の中にある卍山が、二十八歳

の時、宗統復古の発願を起し、師一線道播の下で着々と宗師家の道を歩み、遂に延宝四年（四十一歳）、師の命によって王子山観清寺に住したという事は、特別な事情の説明がない限り一線の法を嗣いだと見て差し支えないように思われる。その二年後、大乘寺月舟に参じて師資契合という順序となる訳であるから、ここに重嗣の問題がありはしないかという事である。かく言うことは、敢えて人の粗探しを目的とするのではない。唯、宗統復古は、この事が問題であったからである。当時の趨勢が卍山をも巻き込むほどのものであったのであろうか。或は卍山の宗統復古運動が、内にその痛みを抱えながら、それが故に一層厳しく推行されていったのであろうか。さすれば、師の人間像は、従来にも増して並々ならぬものとなって来るのではないか。これらを不明のまま放置することは、却って人の真の偉大さを陰蔽してしまふ。筆者の疑問は、すでに烏有であるのかも知れない。しかし、従来の文献において此の問題を明瞭にしたものを小見の故か見ていないし、本書でもこの点には触れられていない。この機会にこれに明確な指示を冀うと共に、突込んだ研究の出現を期待して敢て記してみたのである。

『初期中国華嚴思想の研究』（吉津）

最後に、本書には、両師関係の研究文献が付されて、研究者の便に供されている。宗門では、両師の著述には多大の恩恵に浴している関係上、よく参究されていると思われるが、研究書、研究論文は、数量に限っても甚だ貧弱である。近代に至る宗旨の伝統は、江戸宗学を機軸としたものであると言われる。従って江戸期の宗学が、新しい学的研究の上に洗い直されなければ、宗祖の宗学にまで遡上することは至難である。この代表される両者の

木村清孝著

## 『初期中国華嚴思想の研究』

吉津 宜英

昭和三十四年までの華嚴学の主な成果については『華嚴思想』（法蔵館、昭和三十五年二月）に収められている鎌田茂雄「華嚴学の典籍および研究文献」によって我々は容易にその全貌を知ることが出来る。そして、それ以後の華嚴学の成果を語ることはまさに鎌田博士の研究と業績の歴史を陳べることになると言つても過言ではあるまい。もちろん、『印

研究が、未だかかる現状であるという事は、江戸宗学全般の研究が、殆ど本格的には緒についていないことを意味している。この本書附載の目録は、我々にその怠慢を警覚して、るように思われる。本書の刊行を契機として、この方面の研究を自らも充実し、願わくは結集総合化されることを切望するものである。（講談社、昭和五三年一月、一、八〇〇円、A5版、図版二頁、序・目次九頁、本文三四〇頁）

度学仏教学研究』を披見する時、毎号ごとに華嚴学関係の成果が散見するのではあるが、その問題意識・着想・方法・業績のいづれにおいても博士が華嚴学をリードしてこられた。そのことは以下に列挙する著作によって知られるのである。すなわち東京大学に提出された学位論文の公刊である『中国華嚴思想史の研究』（東京大学出版会、昭和四十年三